



第 23 号

2011年10月28日発行

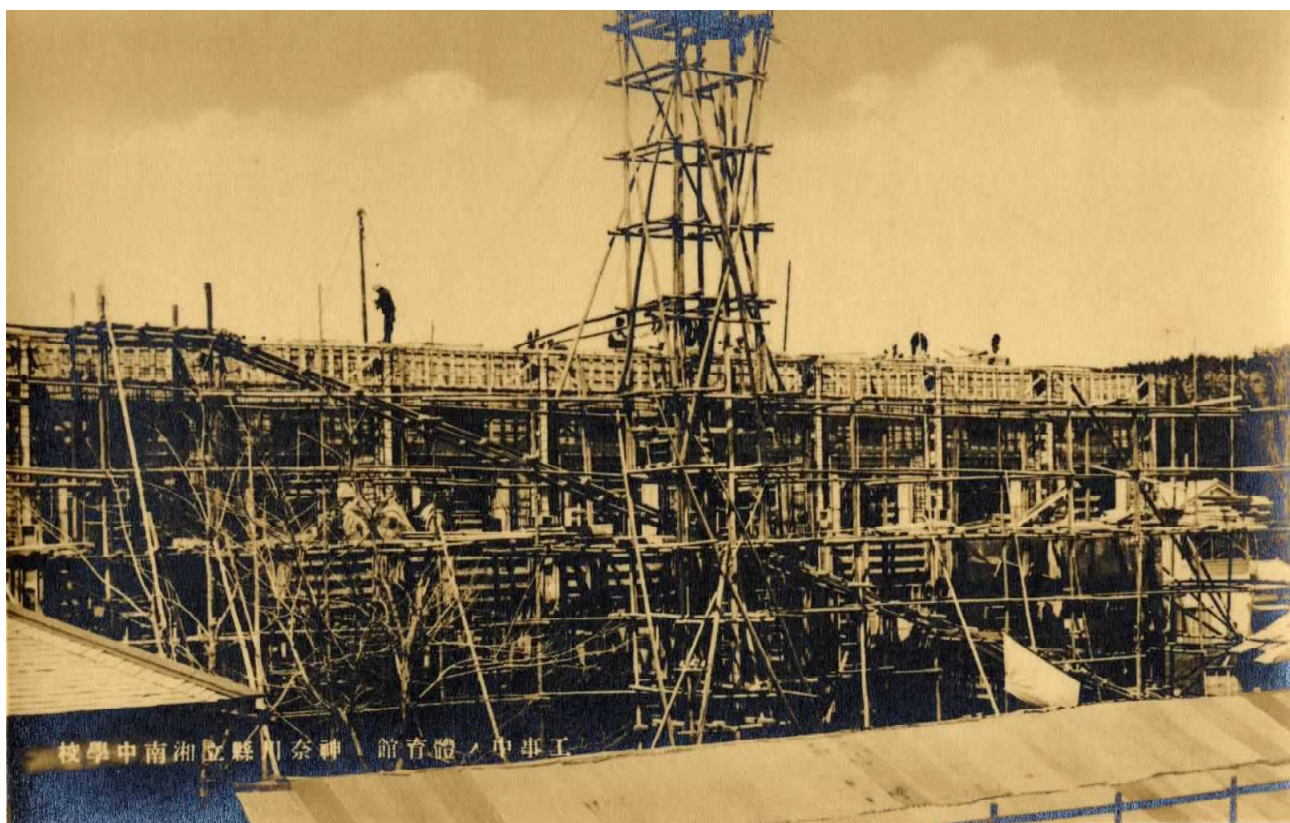
藤 沢 市 文 書 館

〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

藤沢市文書館

検索

ここをクリック!



工事中の湘南中学校体育館(昭和11年)(石井冽氏提供)

上の写真は、建設中の湘南中(現・湘南高)体育館を撮影した絵葉書です。この絵葉書は、工事概要と共に封筒に納められており、工事の完成時に関係者に配布されたもののようです。この工事概要によれば、同校の校友会が昭和10年3月に建設を決議した当初は木造を計画していましたが、耐震耐火構造になりました。そして翌11年2月15日に起工し、6月20日に竣工しました。ちなみに建設に使用した材料は鉄骨・鉄筋合わせて約74トン、セメントは50キロ入りの袋で4200袋、工事人員は延べ2528人でした。(中村)

もくじ

工事中の湘南中学校体育館…………… 1

藤沢近代史話・市役所の望楼…………… 2

古記録を読む 第3回…………… 3

古文書の読み方 第23回…………… 4

藤沢近代史話 市役所の望楼

前号(第22号)の表紙で市役所望楼からの景色が表紙を飾りましたが、ではなぜ市役所に望楼があるのかご存じでしょうか。

●火の見櫓として

昭和15年に藤沢市が誕生した当時、市役所は本町の藤沢公民館の場所にありました。これは大正7年3月に建てられた木造二階平屋建ての町役場をそのまま引き継いだものですが、戦後になると老朽化と狭隘化から建て替える必要が生じ、昭和24年に市制10周年記念事業の一環として新庁舎を建設することになりました。藤沢市成立時より市役所を藤沢駅の近所に移設する構想があり、通称「若尾山」とよばれる地区を官庁街にする計画のもと、その地に現在の市役所本館が建てられました。

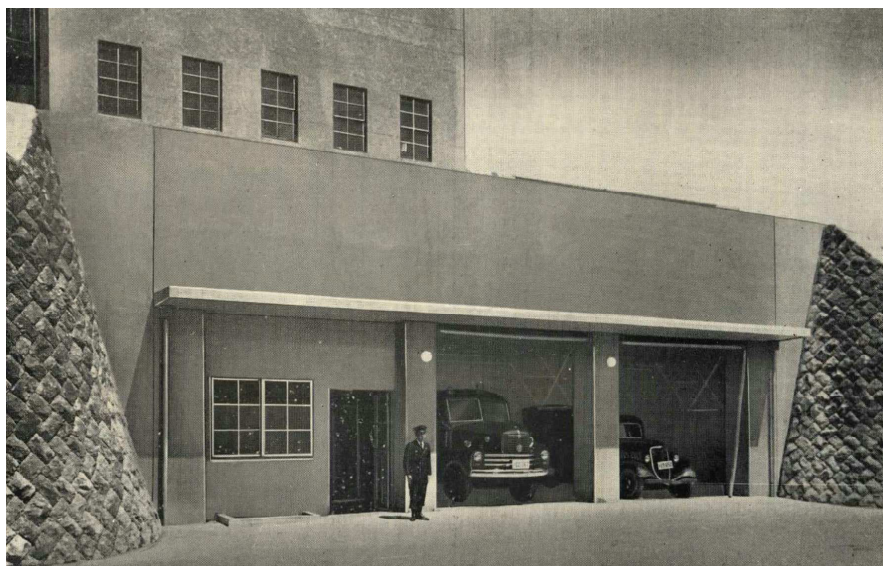
ところで、戦後の民主化の過程において、昭和23年3月に消防組織が警察から各自治体に移管されます。しかし、消防署として藤沢市にあてがわれたのは現在の本町消防出張所の向かい側にあった警察車庫で、市の消防本部としてはあまりに手狭なため、

市役所移設にあわせて、消防車の出動に便利な三叉路に面する庁舎地下に消防署が同居することになりました。そして8階建の望楼は建築デザインにおけるアクセントである以上に、併設された消防署の火の見櫓としての実用的な意味がありました。

●夜間の望楼勤務

昭和29年11月25日発行の「広報ふじさわ」に消防本部の夜間の望楼勤務が取り上げられています。これによると、5～6人交代で1時間づつ勤務し、「監視一時間後次番に引きつぐと、階段をおりて、本部で一時間立番につき、近火の駆込みや、救急車の受け付け、盗難防止にあたります。終ってほっとごろねの仮眠を五時間とってからまた夜明の塔に上って行く」とあります。当時の火災は全日で約2割、夜間だけ採ると6割が望楼から発見されたと広報にありますが、その後の急激な人口増加と高層建造物の増加により、消防署は昭和40年9月27日に奥田の独立庁舎へ移転しました。(澤内)

(参考：藤沢市役所新庁舎建設事務所『藤沢市庁舎竣工記念』1952年、『藤沢市議会史・記述編』1972年)



昭和26(1951)年に新築された市役所の望楼(左上)と消防署地下車庫(右上)。消防署は現在、秩父宮記念体育館の隣に移転し、この場所はシャッターが降りた状態となっています。

古記録に見る藤沢 第3回

『吾妻鏡』における天変地異②

このシリーズの第1回目で『吾妻鏡』における「天変地異」というテーマで小文を書かせていただきました。その後、今年3月に東日本大震災が起きてからは、多くの人が地震や津波に関する記録を調べ、今後の防災計画に役立てようと文書館に来館されています。

★むかしの大地震

『吾妻鏡』には鎌倉で起こった天変地異について記されており、特に地震に関する記述は150箇所に及ぶとされています。そのなかでも今回は正嘉元年(1257)8月以降の記述から、興味深い事柄を取り上げます。

八月廿三日。戊剋大地震。有音。神社仏閣一字而無全。山岳頽崩。人屋顛倒。築地皆悉破損。所々地裂。水湧出。中下馬橋邊地裂破。自其中火炎燃出。色青云々。

(八月二十三日。戊剋大地震あり。音あり。神社仏閣一字として全きことなし。山岳頽崩。人屋顛倒し、築地皆悉く破損す。所々の地は裂け、水湧き出づ。中下馬橋あたりの地裂け破るその中より火炎燃え出づ。色青しと云々。)

8月23日に地震があり、鎌倉の神社仏閣や人家の被害のほか、山崩れ地割れ、さらには液状化などを起こしていたことも推測されます。地割れた部分が青く燃えているのは、地下に溜まっていたメタンガスなどが引火した可能性もあります。

そのあとの9月4日の記述には、

九月四日。小雨降。申剋地震。去月廿三日大動以後。至今小動不休止依之。為親朝臣奉仕天地災変祭。御使伊賀前司朝行云々。

(九月四日。小雨降る。去ぬる月廿三日の大動以後、今に至り小動休止せず。これによって(安倍)為親朝臣天地災変祭を奉仕す。御使は伊賀前司朝行なりと云々)

とあります。

ここから、8月23日の地震のあと、9月4日まで余

震が続いていたことが判ります。

★陰陽師と陰陽道

さらに、陰陽師(おんみょうじ)である安倍為親に地震を鎮めるための祈祷をさせたことも記されています。

陰陽師は古代中国の俗信である陰陽道を用いて吉凶を予知する呪術者であり、陰陽寮という役所に勤める官人でもありました。平安中期以降は加茂・安倍両家によって陰陽道が行われていきました。

安倍為親は、平安時代に活躍した安倍清明の子孫で、安倍家は代々陰陽師として卜占や祈祷を行い、朝廷や幕府に仕えています。

幕府のなかで陰陽道がさかんになるのは、承元元年(1219)の摂家将軍九条頼経の鎌倉下向以降とされています。この時、頼経は護持僧や陰陽師までも伴ってきたので、将軍の周辺は京都の公家社会と同じようになったとさえ言われました。

★さまざまな祈祷

祈祷の内容は天災のためのものや天下泰平を祈るといった公的な祈祷から、将軍個人の病氣平癒や安産祈願といった個人的なものまで多種にわたっています。

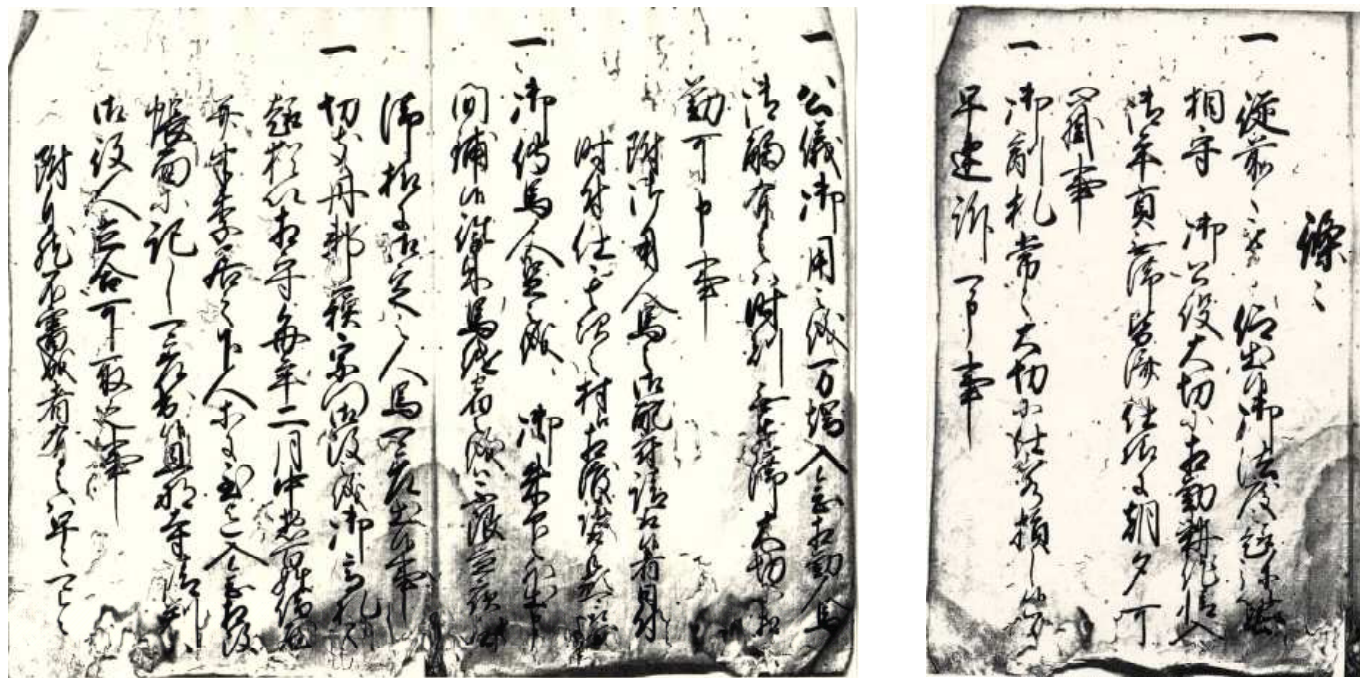
このように武家社会の中にも陰陽道が広まったということは、単に公家風の風習が鎌倉に持ち込まれたというだけでなく、社会状況の不安定さや地震や大火といった災害の多さも手伝っていたのだらうと思われます。

先日の大震災による被害のあまりの大きさに、自然に対する人間の無力さを感じた方も多いと思われます。

そんな時に神仏や占い・まじないといった超自然的なものに頼ろうとするのは、いつの時代でも変わらないのではないのでしょうか。(伊井)

(参考：木村進「鎌倉時代の陰陽道の一考察」(村山修一他編・『陰陽道叢書2 中世』所収、名著出版、1993年))

【問題】次の古文書は、享保13年(1728)下野国譜代烏山藩（大久保氏）が所領の村々に発した「御条目」という文書の冒頭部分です。最初の条に2カ所、4条目に1カ所文字の空白部分があります。これを何といいますか。敬意を示す文書の書き方の作法の一つです。（解答と解説例は次号に掲載）



ミニ展示「関東大震災と藤沢」のお知らせ

今年は東日本大震災がありました。東北地方の太平洋沿岸の被害の大きさには言葉ありませんが、当日は藤沢でも長時間横揺れが続きましたので、今後の関東での地震を考え、不安に思われた方も多いと思います。そこで当館1階のロビーにて、ミニ展示「関東大震災と藤沢」を展示することにしました。右の写真は、**大震災当日の午後1時頃に撮影された藤沢駅の様子**ですが、屋根を残して全潰しているのが分かります。あらためて、関東大震災の被害の大きさがうかがえるかと思います。ささやかですが、ご覧いただければ幸いです。



編集後記

「古記録に見る藤沢」にもあるように、去る3月11日の東日本大震災発生以降、藤沢市域の古地図をご覧になる方が多くなっています。

文書館には、明治15年に作成された「仏色彩式地

図」の複製を始め、旧参謀本部陸地測量部が作成した地図の複写などを所蔵しています。また、新旧の対照であれば、高木勇夫編著『地図に刻まれた歴史と景観 1 明治・大正・昭和 藤沢市』があります。お気軽にご来館下さい。（中村）